

シンポジウム報告

「フォーラム高山2000」

山口裕之

2000年3月27日から30日にかけて開催された「フォーラム高山2000」についてはすでに30号で《シンポジウム報告》として紹介したが、このときに行われた二つの講演をもとにした論文を31号で掲載した。「メディア - ドイツと日本」というタイトルのもとに二つの基調講演とディスカッションを行ったこの「フォーラム高山2000」自体についてはすでに報告を行っているので、今回は以下に掲載する論文に先立って執筆者のお二人について簡単な紹介をさせていただきたい。

向井知子氏はDAAD奨学生の時期も含めて1993年から1997年までKunsthochschule für Medien Köln (Audiovisuelle Medien, Mediengestaltung) に在籍、その頃より、マルチメディア空間演出プロジェクト「まだ白く、もう白い (Noch Weiß Schon Weiß)」(1995)を開始し、以後「まだ白く、もう白い - ある空間像について (Noch Weiß Schon Weiß - Vorstellung eines Raumes) (CD-ROM, 1997)、「Noch Weiß Schon Weiß - Zwischen Dunkel und Licht (まだ白く、もう白い - 暗がりと明かりのあいだに)」(展覧会/空間演出インスタレーション、Trinitatiskirche, Köln, 1997)、「まだ白く、もう白い - 視覚を超えて (Noch Weiß Schon Weiß - über das Auge)」(展覧会/空間演出インスタレーション、Bonn, 1997-98)等様々なバリエーションを試みたシリーズを展開している。現在、メディア・デザイナー、メディア・アーティストとして活動するとともに、いくつかの大学で教育活動も行っている。今回掲載される論文では向井氏のメディア/空間造形のコンセプトが提示されるとともに、この分野においてともに活動しているデザイナーやアーティストたちについても紹介されている。

Marc Löhr氏は現在、山口大学経済学部助教授として「国際メディア論」等を担当している。「メディア・ジャンキー」を自称するだけあって、同氏のマスメディアに対する知識と旺盛な興味には目を見張るものがある。Löhr氏の論文は、ドイツと日本の新聞に関する歴史的な経緯と実証的なデータに基づいて的確な見取り図を与えるものとなっているが、彼の知識と理解は単に書物によるものだけではなく、ドイツでは新聞社で実際に新聞発行の場に関わり、また日本でもメディアの現場を経験していることによって、さらに説得力をもつものとなっているのかもしれない。なお、「フォーラム高山」では日本語で講演が行われたが、今回はドイツ語での論文掲載となった。

[この文は31号に掲載した向井知子氏とMarc Löhr氏の報告の前に掲載すべきであったが、編集の手違いで掲載しなかったので、お詫びして、改めて掲載させていただく。また、Marc Löhr氏の報告には多数の図表が付されていたが、これも31号では手違いで掲載しなかったため、あわせて今号に完全原稿を掲載させていただく。] (編集委員会)